

「英語を勉強する」と「英語で勉強する」のあいだ

田中 美栄子

鳥取大学大学院工学研究科情報エレクトロニクス専攻

'Studying English' and 'Studying in English'

Mieko TANAKA-YAMAWAKI

Department of Information and Knowledge Engineering, Graduate School of Engineering

Tottori University, Tottori, 680-8552 Japan

E-mail: mieko@ike.tottori-u.ac.jp

Abstract: Although the English skill is one of the most important elements for Japanese to globalize, it is more important to use English as a tool to absorb knowledge and communicate with friends who do not understand Japanese language. I would like to recommend the students and young researchers NOT to study English but to USE English to study your field, preferably with a lot of joy.

Key Words: Study English, Study by English, Globalization, TOEIC

1. はじめに

近頃、鳥取大学に於いても『グローバル化』が叫ばれ、学生の TOEIC 点を何 10 パーセント上昇させるかが真剣に議論されるようになってきた。それ自体は大変結構な事であるが、TOEIC の点数が直接に英語によるコミュニケーション能力に結びつかないのも、また事実なのである。そこで、「英語を勉強する」と「英語で勉強する」の間にあるギャップについて考えてみたいと思う。

高校時代によく聞かされた話として、次のようなものがある。英語の先生と理科の先生とが連れ立って海外旅行に出かけた。行ってみると、英語の先生は少しも英語を話さず、もっぱら理科の先生ばかりが現地の人と会話をしたというのである。まず、タクシーに乗る。英語の先生は「このような場合の正しい言い回しはどうあるべきか」と考え始める。一方、運転手はどこに行くのか早く注文してほしいからイライラする。見かねた理科の先生は行き先のホテルの名前だけを、「○○ホテル！」と大声で運転手に告げた。運転手は OK、となつてすぐに発車し、彼らはホテルに着いた。次の日、ホテルのフロントにその日行く場所への詳しい道順を聞くことになった。英語の先生は今こそ英語力を発揮せんと、「Would you please let me know the way to reach ○○ ?」等と下を向いてボソボソ言っているものの、相手は『解らない』と当惑している。そこでまた理科の

先生が大声で相手の目をしっかり見て「○○!!」と行き先だけを言うと、すぐに地図を出して教えてくれたのだそうだ。

2. 外国語は勉強せず楽しむべし

その後、私は大学に入り、第二外国語としてどれを選ぶべきかを決めるガイダンスというのに出席した。半世紀近く前のことで、今流行の韓国語や中国語はなく、ドイツ語、フランス語、それにロシア語の先生がそれぞれ壇上に立って説明をされた。全て日本人である。この時のロシア語の先生の説明は驚くべきものであった。「私は一生かけてロシア語を研究して来ました。しかしロシア語は全く話せません」この先生に教わればロシア語は話せなくてもロシア語がわかるようになるだろう、と私は思った。しかし大学ではロシア語を選択せず、代わりに街の「日ソ協会」に通って習うことにした。大学では第二外国語としてフランス語を選択し、フランス人の先生が講師を務められる会話クラスを取った。これによりロシア語とフランス語の基礎知識を得ることはできたが、どちらも使えるレベルには達しなかった。

ところで私が英語を勉強したのは中学 1 年の時だけで、そのあとは殆どしなかった。英語が得意だったからではない。理由を強いて言えば、私は英語について既に文法を始めとする知識を十分持っているために、外国語とは思えず、今ひとつ知識欲が湧かなかつたからである。それ以外の

外国語はワクワクする程に新鮮で、私の知識欲を猛烈に掻き立てたのに英語だけは駄目だった。

従って大学の教養部にいた間の私の英語力は惨憺たるものだった。とはいうものの、高校時代から「ラジオ英会話講座」というのが好きで、ずっと聞いていた。講師の松本亨先生の大ファンでもあった。松本先生は英語を教えてくれるというよりは、英語について教えてくれたり、英語でしか表現できない冗談を言ってくれるのだった。例えば、とある食堂でメニューに「アベックサンド」というサンドイッチがあるので注文したら、パンにレタスを挟んだものを出された。不思議に思ってウェイターに尋ねると、こんな答えが返ってきた、「Let us alone! さ」。また、留学時にパーティーで可愛い娘さんを見て、どこから来た子かなあ、と呟くと、横にいた友人が「I'll ask her.」と言ってその女の子のそばに行った。僕はそれを誤解して「彼女はアラスカ出身だよ」と言われたとばかり思っていたのですよ、等という話をドンドンされるのである。

高校生の頃、私がハマったのはシェークスピア戯曲の対訳本であった。これも発端は松本亨先生のラジオ講座だったように記憶しているが、もしかしたらこれは別のラジオ番組だったかもしれない。「ジュリアス・シーザー」という戯曲で、シーザーがブルータスに刺殺される場面のと（つまりあの、「ブルータス、お前もか」と言って倒れる場面である）、驚くローマ市民に向けて、マーク・アントニーが行う演説が実に巧い、とラジオで解説されるのである。何やら聞いているうちに、聴衆は皆、アントニーの行いを正しいと思うように誘導されて行く過程が、秀逸である。この朗読をラジオで聞いてすぐ、対訳本を手に入れて読みふけた。英語が左の頁に、日本語が右の頁に書かれており、両方をほぼ同時に目に入れることができる。勿論、英語の方はほとんど解らず、もっぱら日本語の方を読むのだが、読んでいるうちに「これは英語だとどうなるのか」と気になり、同じページの英語を見て、なるほどこんな風に言うのか、と何となくではあるが記憶する。

3. 英語を使って勉強すべし

大学3年になると、どうしても英語力を鍛える必要に迫られた。ゼミでその分野の研究の発端となったラザフォードの大角度散乱についての原論文を読んで発表しなければならなくなったのである。この時ですら、英語を勉強する気にはなれなかった。私は文法は問題なく解るのだが、単

語力がゼロに近かった。論文を一行読む間に知らない単語の方が知っている単語より多い位だった。しかし、翻訳は出回っていないので自力で英語を読んで内容を理解する他はなかった。私はその内容をどうしても理解しなかったので、ほぼすべての単語を辞書で引いて、どんなに時間がかかっても読み終わるまで頑張ることにしたのだった。ゼミで必要な論文はこれ一つだけで良かったのだが、関連論文を図書館にこもって読み始めた。すると一日がすぐ終わってしまうので、自宅通学ではどうにも無理があると感じ始めた。そこで大学の近くに4畳半を見つけて下宿生活をすることにした。ひと月4千円の部屋代と食費をアルバイトで稼ぐことになり、家庭教師を始めた。給料はわずかだが、食費を切り詰めれば何とか生活できた。生協ラーメンが一袋19円だったので、これで3食賄うと1日50円位で暮らせるのであった。客観的に見れば苦学生のようなのであるが、自分では楽しくてしようがなかった。大学の図書館とはこのように凄惨な情報が詰まっているのだということに改めて驚き、大学院に進むことにした。

その後40年程、毎日英語「で」勉強している割には一度も英語「を」勉強したことはないのだった。そのせいで今でも英語は苦手である。とは言え、25年ほど前に、まだアメリカにいた時代にちょっとだけ英語に自信を持った事件があった。私はニューヨーク州にあるロチェスター大学で博士号を取り、ニューヨーク市立大学の助手をした後でニューヨーク州立大学の助教授を1年お試して経験し、その後はマサチューセッツ州立大学でテニユアトラックコースの助教授になって物理学を教えていた。5年たってテニユアが取れそうになったとき、それだけでは研究費が得られないので、ちょうどその頃流行り始めたコンピュータ・サイエンスの学位も取ろうと思立った。研究費はこれから発展する分野には出るが、既に収束しつつある物理学にはもう出ない、というのがその頃の常識となっていたからである。同じことなら本格的にやろう、と思ったので、マサチューセッツ州立大学の中で、コンピュータ・サイエンスで博士号の出せる程ハイレベルを誇る、隣町アムハーストにある大学院に正式に入学することにした。入学志願書にはGREという大学院入学資格試験(Graduate Record Examination)の点数とTOEFLという英語の試験の点数が必要書類であった。そこで両方を受けることにした。これはビクビクものであった。しかし受けなければ必要書類が揃わないので、肝試しを兼ねて受験するこ

とにした。本職で忙しい身であるから受験勉強をする暇はない、というのは言い訳で、本当は自分の実力を試してみたかったのが本音かもしれない。とにかく準備なしで受けてみたら両方とも満点の75%くらいであった。自分としてはもっと駄目なようにも思っていたので、何というか、少々自信がついてしまった。

4. 仕事で使う英語

1991年に日本に帰って来てからはあまり英語を使わない生活が5年ほど続いた。当初は女子大で情報科学を教えていたが、新設学科のため雑用に追われてあっという間に5年が過ぎていた。知人に勧められて国際会議なるものに行って研究発表をした時は殆ど英語が出てこなかった程、英語が抜けてしまっていた。しかしその発表内容を論文誌に出すようにと言われて、英語の文章を書いているうちに段々と慣れてきたらしく、しばらくするとあまり英語に苦痛を感じなくなっていた。アメリカの大学でテニユアを取った人が英語が苦痛とは信じられないという人も多いのだが、私は本当に英語が苦手なのだ。その後は毎年のように国際会議に出て英語を使っているが、やはり英語は苦手である。自己弁護のようだが、外国語は苦手なのが当然ではないかと思っている。

しかし話をする相手が日本語を解さない場合、頼れるのは英語である。私が抵抗なく英語を使えるようになったのは、英語が巧くなったからではなく、慣れと必要性によるものであると思う。言いかえれば、言いたいことが伝われば良いと割り切って、下手な英語を恥じなくなったとき、日本語と同じ次元で英語が使えるようになった。

国際会議の常連になると、もっと本格的に理系の研究をやれる環境が欲しくなり、6年お世話になった女子大を去って宮崎大学の情報工学科に移ることにした。これで給料は下がったが環境は確かに得られた。何しろ24時間いつでも研究室を使えるのである。周りの同僚も皆、1年365日24時間研究室に籠っている人が多かった。前任校の女子大では講義終了後に研究室を使用したり、週末に校舎に入るのは禁止されていたのである。それに比べて天国のような宮崎に6年を過ごした後、鳥取大学の同じような学科に移ってきた。環境は同様であるがこちらの方が夏の暑さが格段に低く過ごしやすい。実は宮崎の夏の暑さは私の体力では耐えかねるものがあった。

5. 学生の英語力

周囲の学生の殆どが英語を苦手としている。つまり私の同類である。そういう学生を相手に、TOEICの点を少しでも高く取るよう勧めている。じつは本心は英語を勉強するのではなく、英語で勉強すべきだと信じている。ただ、英語で勉強したいと強烈に憧れるほどの対象に出会えば、言われなくてもするはずだから、敢えて言わないだけなのだ。特に勉強したいことがないうちはTOEICの受験勉強でもして少しでも高い点を取るに越したことはないのだから。

(受理 平成24年10月31日)